

労協連だより

暑い、本当に暑い夏がやってきた。連合会は今、25周年の節目となる今年度をどのような取り組みと成果で駆け抜けるのか、その試行錯誤の中にある。秋の25周年記念シンポジウムの位置づけを明らかにし、そこに向けてのプレ集会和政策提起の行動が急ピッチで準備されている。また、記念シンポの翌日はケアワーカー集会、そして秋本番には協同集会 in 長野と続く暑さである。

7.24のプレ企画としてのシンポジウムは、いわばこの夏の行動を意思統一し、新しい挑戦を決起するために用意される場だ。介護から本格化した仕事おこしを、様々な場面・産業に広げていくこと、そのための政策提起や協議を、行政などを中心に働きかけることが、夏の行動の主要課題だ。この取り組みが、秋から冬、そして来期へと続く「仕事おこしの全面化へ」の第1歩だ。これを表の課題としながら、それを支え推進する真の課題は、我々自身の協同労働の深まりであり、「協同労働力」の獲得と言うべきテーマである。その意味で、行動・成果は常に協同労働力を高め強めることにつながっていくことを、とりわけ意識化した夏の行動になるだろう。プレ企画シンポジウムには、連合・全労働・ILO・経産省など外部の方々からの期待・連帯を受け、全労金・NPOなどともに仕事おこしを志す仲間の実践を学び、全国で先進的な挑戦を始めた仲間からその意欲を吸収する場となる。この場を「よかった」で終わらせず、行動の「決起」の場として、シンポジウム後の

古村伸宏（日本労協連・事務局長）
足早な行動を連合会としても進めなければならない。

協同集会も、分科会の企画・キャスティングが大詰めを迎えている。暑さの到来とともに、本部・協同総研も日替わりで参加メンバーをやりくりしながらの、汗をかく行動が本番だ。残念ながら、まだ新しい出会いを創造する、という水準まで持ち上げている段階であるが、それでも、長野で取り組まれている様々な実践が、あらゆる分野に広がっていることを痛感する。動けばあたる、あたればつながる、というのが序盤の手ごたえだ。この経験を、どれだけ多くの労協のメンバーが経験できるのか。今回の集会はここに徹底してこだわってみたい。幸い、実行委員会への組合員の参加は、会を重ねるにつれ増えてきている。これを行動・実感へと結ぶよう、この正念場をしっかりと位置づけたい。

不惑を迎え、いっそう時の流れの速さを感じる今日この頃。労協の夏は別れの夏。改めて学ぶことと体感することの大事さを痛感する。それは一方で、「挑戦し」「心つなぐ仲間」なしには実のない行いかもかもしれない。人間存在がちっばけな芥子粒のように感じる海の底で、心を洗い体中の感覚を研ぎ澄まし、暑さを充実感へと変える夏にしたい。労協連合会の25周年は、全人格・全感性を磨き上げ、「仕事おこしの全面化、協同労働の本格化」が具体化することに、目標をすえて取り組もう。これまでの、そして未来の仲間の分まで。